

## 最優秀賞・地域企業賞（マイヤ賞）



### 家具がつなぐ、思いと景（けしき）

菅野 佳奈子

今年で創業 84 年となる「桜木家具」は、江戸時代から続く岩谷堂筆筒の伝統を継承する家具店。奥州市と大船渡市、陸前高田市に店舗を構えていたが、東日本大震災により沿岸の 2 店舗が被災、その 2 年後に大船渡店を再建させた。

同社の常務取締役であり、大船渡店の店長を兼任する高橋勇樹さん。彼が店の再建にあたって掲げたコンセプトは「家族みんなが楽しく買える店」。店内に並ぶのは職人が丹精を込めて作った岩谷堂筆筒や品質の高いベッド、トレンド感がありながらリーズナブルなテーブルウェア類、茶目っ気ある動物の置物など。高橋さんは、「おじいちゃん、おばあちゃん、息子夫婦とお孫さんたちが、ワイワイと会話しながら商品選びする様子を想像しながら店づくりをしています」と微笑む。

古くは嫁入り道具としての婚礼筆筒。やがて子宝に恵まれると鯉のぼりやお雛様、子どもが成長するにつれ学習机や子ども用ベッド、そして子どもが成人し家を建てるころには、両親が援助で家具を購入する。生涯を通じたお客様との付き合い、「家具屋のサイクル」があるのだと、高橋さんは先輩社員から教わった。「家具を買う」という行為に込められた大切な人の幸せを願う気持ちは、いつの時代も変わらないのだろう。

高橋さんの祖父、伯父、父親は共に筆筒職人で、伯父に至っては一度途絶えた岩谷堂筆筒の技術を復活させた人物。そんな家具屋の家系に生まれた高橋さんも、子どものころから家具配達の手伝いをするなど家業を継ぐことを意識していたという。しかし、本来は自分に自信が無く、人と喋ることが苦手な性格。「当時は接客して商品を買ってもらうことなど想像できなかった」と高橋さんは振り返る。

転職となったのは、21歳のころ。いずれは岩谷堂筆筒を海外進出させたいという思いから、オーストラリアとイギリスに留学。イギリスではトラファルガー広場を行き交う人々を対象に家具の趣向アンケートを実施した。片言の英語で、必死になって現地の人にプレゼンすると、相手は高橋さんの思いを分かってくれたという。「自分の思いをきちんと伝えることこそ、大切なんだ」。帰国後、その経験は接客にも活かされ、さらには地域活性化の活動へと広がっていった。言葉の通じない世界での経験が、彼の意識を変えたのだ。

大船渡店を再建させて 11 年。店には震災前からのお客様が「あんだの父ちゃんから婚礼筆筒買ったんだぞ」と言いながら来店してくれる。それは「信用と義理人情が一番大事だ」という亡き父の言葉が、今も高橋さんの中に生きているからだろう。

家族で食卓を囲み、ソファでくつろぎ、心地よいベッドで眠りにつく。そんな日常の「景（けしき）」に欠かせない「家具」の存在。生活を支え、共に人生を歩むものだからこそ、思いのこもった店で選びたいものだ。

※コラムの著作権は、すべて執筆者に帰属しています。無断での転載、使用はご遠慮ください。